

「2024年度香港中文大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学文学部4年 青波 亮太郎

本プログラムは3週間という比較的長い期間の短期留学であるため、腰を据えて学ぶことができた。自分は以前、浙江大学のプログラムにも参加しているため、その1週間の差は大きく感じられた。

中国語（普通話）に関しては、授業での学習がメインである。午前・午後合わせて6時間の授業で1つの教科書を軸に学習し、しかも先生方はさまざまな方法で学習内容の定着を図ってくれるため、着実に力をつけることができた。今後の中国語の学習に欠かせない土台を構築できたと評価している。さらに、本プログラムは香港という土地柄から、広東語・普通話・英語の3言語が混在する社会において言語を学習するというのも独特であった。

言語もそうであるが、実際に香港に滞在しないと分からない事情を体得することができたのは大きな収穫であった。最も痛感したのは物価の高騰である。コロナ禍ののち、すぐ隣に位置し、香港に比べ物価が安い中国・深圳に消費者を奪われた結果、飲食業が不振となっている状況は、実際に香港で生活することで実感できた。やはり、現在進行形で大変動の中にある地域を訪れ、その変化をじっくり見つめるのは重要であると再認識させられた。香港という東アジアを代表する都市にして、極めて特異な都市に、2024年という時期に滞在することができたのは僥倖である。

こうした香港を相対化する視点を持てたのは、隣接する深圳とマカオを訪れたことも大きい。この3都市は、僅かな距離の中に存在しながら、全く異なる歴史的経緯から、大きく風貌を異にしていた。さらに、各都市での体験は印象深く、各地域の個性を身体で感じ取ることができた。ひいては、街を歩く中で東アジアの近現代というものを考え直すきっかけになったと言えよう。僅かな休日を費やしてでも行く価値は間違いなくあった。

こういった休日の遠出のみならず、香港中文大学という伝統と現代性を併せ持つ大学に滞在する経験も得難いものであった。京都大学とは異なり、広大なキャンパスが山の中に存在し、移動手段はバスでなければ坂道を歩いていかないといけない環境は興味深かった。図書館の充実度も印象深い。

また、報告する上で欠かせないのは、たくさんの人たちとの出会いである。さまざまな出身・経歴を持つプログラムの参加者をはじめ、共同セミナーで交流した香港中文大学の学生の方々、ご縁で会食することができた方々など、数え切れないほどであった。留学というものの面白さの真髄はここにあるようにも思われる。特に、授業のクラスは少人数であった上に、授業内で発言・コミュニケーションをする機会が多く、とても和気藹々とした雰囲気の中で交流することができた。

最後に、私はプログラム参加以前から長期の留学をしたいと考えていたが、今回、長期の滞在により得られるものの多さを実感し、また自分の中国語学習の特性と現状を勘案して、なるべく早く中国への長期留学に行きたいと考えるようになった。今回のプログラムは足掛かりに過ぎず、今回のプログラムで播かれた種をどれだけ花咲かせることができるかが重要であると考えているので、引き続き研鑽を積んでいきたい。